

総務委員会 県内調査活動状況

- 1 調査日 令和7年11月10日（月）
- 2 出席委員（7名）

委員長	向山 憲稔					
副委員長	飯島 力男					
委員	藤本 好彦	桐原 正仁	笠井 辰生	名取 泰		
	志村 直毅					
- 3 欠席委員 望月 勝 渡辺 大喜
- 4 地元議員
午 前 古屋 雅夫
- 5 調査先及び調査内容

（1）【山梨市防災倉庫他】

防災倉庫及び避難所の整備について

○調査内容（主な質疑）

- 問) 資料では避難所の指定福祉避難所数が山梨市はゼロになっているのだが、令和6年11月の記述ということで、現状はどのようなになっているかを教えていただければと思う。
- 答) 最新のデータが令和7年11月現在である。一般の避難所についても、37か所から39か所に増やし、2か所増えた状況である。福祉避難所だが、こちらのほうは、民間事業者等との災害協定の締結を進めて、現在17か所を確保している。
- 問) 着実に進展をしているということでよく分かった。
もう一点、食事の提供の部分で、食事の質の確保としてキッチンカー等の活用という項目がある。私の地元は市川三郷だが、近所の農家が漬物などについて法律が変わって、家庭用の漬物がやたら売れなくなったというときに、キッチンカーを導入して自分のうちで作った物を売れるようにして、キッチンカーは防災のときも活用できるはずなので、ぜひ行政とも連携してという話をしていたのが少し頭に残っている。市内のキッチンカーとの連携といったことを、山梨市はされているのかどうか教えてほ

しい。

答) キッチンカーについて、トイレカー、キッチンカー、キャンピングカーは、機動性が非常に高いということで、先進事例を確認しておくよう市長からも指示をいただいている。ただ、1台1台が高額なので、なかなかすぐというわけにはいかないが、国の補助を使いながら導入するかどうかということである。

令和6年の能登半島地震については、山梨市内の中華料理店を運営されているところで、災害用キッチンカー、オレンジの災害用と文字が入ったものが現地に入っており、そちらを実際に派遣して、山日新聞にも2回ほど記事が載った。

実際、現場はどうだったのか、キッチンカーはどんな活躍をしているのかというノウハウを教えていただき、購入したのはいいのだが、やはりドライバーやそれを運用する人材もセットで必要になってくるので、箱だけ購入しても意味がない、よくその辺りを考えたほうが良いということで、例えば、すぐ食べられる備蓄食料をもっと市で増やしたり、アレルギーも含めて、アルファ米を使ったピラフ、ドライカレー、白米、おこわなど、いろいろ種類があるので、幅を広げて対応することも行政としては考えられるのではないかと御指導いただいている。

答) 直接、今のキッチンカーではないが、車の提供ということでは、次年度、トレーラーハウスも災害用に備えていく予定である。



※説明、質疑の後、山梨市防災倉庫他の視察を行った。

(2) 意見交換会

- ① 出席者 やまなし女性M i r a iクエストの参加者の方々
- ② 内 容 「女性が活躍しやすい社会を実現するために今必要なことについて」

○主な意見

委員) 最初にM i r a iクエストとの関わりのところだけ少しお聞きしたいのだが、先ほどもあったように、異業種の方が集まる場になっているということだが、このM i r a iクエストを通じて得ているものというか、考えるきっかけになっている部分とか、そういうものがあつたらもう少し聞きたい。

また、そういったものを自社に戻って、どのように職場にフィードバックしているのか伺えればと思う。

出席者) 得ているものは、いろいろな会社のいろいろな立場の方がいるので、そういった話を聞くことでとても刺激を受けており、自分の会社にはないような発想とか、そういった意見を得ることもできているということで、私個人としてはこの機会に参加させていただいたということで、とてもありがたく思っている。

会社でどのようなフィードバックをしているかという話だが、実は参加をするに当たって、私どもの会社にダイバーシティのチームがあり、もともと私はそのダイバーシティのチームのメンバーとして参加しているということもあって、このM i r a iクエストのプロジェクトをせっかくやるのであれば実現させたいということで、私どもでカラーズというネームでそのダイバーシティのチームがあり、社内で横断的にメンバーがいるのだが、そういったメンバーにもアイデアを出していただいたりして、会社でいろいろなアイデアを募って、今、実現に向けて進めているところである。

出席者) まずこのM i r a iクエストに参加して得ているものだが、私自身経理課に所属している。いわゆるフロント部門ではなくバックオフィス部門なので、外部とのつながりは日常の業務ではないので、こういった横のつながりができるということは、もうそれ自体がありがたい機会で、非常にいろいろな情報を得られる機会になっている。

社内へのフィードバックについてだが、当社が特別というか、上司の考え方だと思うが、今回の機会、女性管理職のための研修とはなっていないが、そこに女性管理職になるためにいろいろな学んでこいということに縛られずに、自分がこれから働く先で糧になるような使い方として、この場を使ってもらえればと言われていた。自分がやりたいことや学びたいことが研修として得られるようにという視点で参加していて、終わったときには発表会などがあると思うので、そこで成果報告として会社にはフィードバックできればと思うが、やっぱり、ただ、こういった横のつながりで、他社の情報などはこまめに上司に報告して、他社情報として共有している。

出席者) やはりふだん総務という仕事で、社内で業務をしていることが多く、また、自分と同年代の方が社内に少ない部分があったので、ここへ参加して、同じような目的を持ってふだん会社で頑張っている方からいろいろなお話を聞けて、いろいろな考え方があるんだとか、制度のことなどでも相談に乗ったりしてもらったりとかということで、とても楽しく勉強させていただいている。

自社へのフィードバックだが、やはりここで皆さんにお聞きした考え方などを、自分の中で生かすことができ始めている。今、プロジェクトを進めているので、皆様から頂いた意見を生かしていく形を取っている。

委員) 今お聞きした部分にも重なるのだが、先ほどの話の中で、まだ悩みなどが女性発信になっているとか、ワーキングマザーブラックなどがあったが、本当に切実だなと感じた。

そういうことを、社内の中でも言える雰囲気というか、そういうものがつくられつつあるのかなとか、まだまだちょっと社内では言いづらい部分もあるのかなとか、少しその辺りをお聞きしたい。しゃべりづらいかもしれないが、そういうのもクエストの中で共有して、1人だけではなくて、みんなで悩んだりもしながら共有しているというのはプラスになっているのかなと思うが、県としては、こういった場を管理職に限らず、もっと広くいろいろな女性の方に集まっていただいて、こういう機会をつくっていくことが大事なのかと思ったのだが、そういうところで御意見があれば、教えていただければと思う。

出席者) 女性のメンバーでいろいろ話すことはあるのだが、家庭や育児などの相談や業務の相談もあるのだが、私たちの社内では割と女性も多いので、育児のことや家庭のことなど、割と雑談も含めて話をすることが多い。

県で女性を集めて話す機会をとおっしゃってくださったのだが、それだけだと、どちらかというところと解決につながらない。ただ愚痴の言い合いみたいなものになってしまうのかなと思う。せっかく今日議員の方たちがいらっしゃるのでお聞きしたかったのだが、家事、育児はどうされているのか。何をやっているのか聞いてしまってもいいものか。

女性だけで話しても未来がないというか、先ほど私も最初にお話させていただいたのが、本来、家事をどうやってやるのかというのを会社で教えるなんてちょっとおかしい話かなと思う。多分女性はみんな家事を会社で習ったり、育児を会社で習ったりしてきてないように思うので、男性の方だけに意識改革をするのではなくて、女性も意識改革しなければならぬところがあって、家庭でできないときに、旦那さんに相談してできなかったらどうしよう、御飯を買いに行こうとか、誰かに頼もうとやっているのは、多分皆さん女性だと思う。どうにかそれをしていくというか、その意識改革もしなければならぬ。女性がそこをするのではなくて、別に男性がやってもいいと考えていて、女性だけの集まりだと、多分用をなさないというか、その先がない。育児休暇だけ1か月、2か月取っても、その後ずっと育児も家事も続く。その後の対策がないという落とし穴があるように感じているので、1か月、1年、例えば育児休暇で休んでも、子供は1歳なので、その後ずっと続く。

小学校1年生問題などもある。せっかく議員の方たちがいらっしゃるので、御自宅で家事、育児、どのような対策を取られているのか聞けたらうれしいと思う。

委員) さっき話を聞いていて、それが一番耳が痛かった。昨日すごく怒られたばかりである。私はあまりやっていないので、ほかの方に。

委員) 大分昔はやっぱり育児もやらなければという思いはあり、必死でやっていたものの、それが十分だったかどうかは全く自分でも分からないが、今聞いていて、職場で家事や育児を教える場、相談できる場みたいなものを、女性だけでなく、男性にもそういう情報提供が必要になるということか。

出席者) そうである。女性活躍を実現するために今必要なことは何だというテーマだったので、そういうのを会社で教育するのはどうか、そういう時間を業務として設けるのはどうかと思った。お金をかけて教えるというのはちょっとどうなのか。ただ、意識改革をするという意味では何か大きなポイントになる。

委員) むしろ会社の上司の人たちに出てきてもらって、こういう現場の声があるみたいなものを他社の人から言ってもらえるような、そういったほうが男性の人たちの意識改革というか、特にさっきおっしゃっていた世代間、昭和世代と令和世代にギャップがあるので、どちらかという、まだまだ年齢は若いけれど、昭和世代の意識があるから、それをどう変えていくかというような取組を、女性向けだけにやるとなかなかそこから変わらないから、男性の特に今の若い世代ももちろんだけれど、それより上の世代に当てるといえるような施策があるかという話なのかと思った。

出席者) そうである。女性も必要だと思う。自分たちがやらなければならないと絶対思っている。

委員) 私の時代というのは本当に昭和で、やっぱり周りの人が助けてくれた、年配の方とか。家族でも同居が当たり前だった。だから、今の時代でそれをどうのこうのということはおそらく絶対言えない。私と若い世代というのは全然違う。

ただ、やっぱり私はいいものは昔のまま、親に頼ったり、近くの人たちに頼るというのは、やっぱり残していきたい。例えば、上司、仲間、そういうものがみんなで助け合うという、私たちの時代はそういう形だった。私の地域では赤の他人とかそういう人たちでも、みんなで助け合うのが普通のことだった。

だけれど、今の話を聞いていて、今は全然違う。例えば私がもし独身だったら、年配の人たちが、あそこの息子に嫁さんを探そうと、全然関係ない近所の人からそういう世話をする時代だった。だから、本当に合コンなども要らないぐらいだった。今はそれがもう駄目になって、私も口出しすることができない。

だけど、やっぱり昔の時代のことをいっても、もう今とはちょっと違うが、それに似たような形で会社の上司であろうが仲間であろうが、みんなでやらないとならない。若い人たちの間だけでは本当に解決していかないと思うので、みんなが集まって話し合っ、いい方法で進めていくというのがいいと思う。

委員) 私は、今、大学生と高校生の息子がいる。私は秘書時代ちょっとなかなか自宅にいなかったのだが、その前の市議会議員の時代は、家にいる人間が御飯を作るということはやっていた。

自分の中では家事は分担していると思うが、先ほど言われたように、家事に対しての責任感を妻がどう思っているのかというのは、皆さんの意見を聞く中で改めて感じたので、もっともっと参画できるようにしたい。

委員) 私は今61歳で、小さな商売を家でやっていて、結婚してからしばらくは家とは別のところで妻と暮らしていて、1人目が出来てから家に戻る形で母と暮らすようになった。そうすると、やっぱり妻がしゅうとめを意識して、自分が旦那の世話をしなければならぬという意識がどうも強くあるようで、私自身が町の男女共同参画委員になってから意識が啓発されて、食べた後はしっかり食器を洗うとか、洗濯物をなるべく自分でできるものはするが、どうも母親は面白くないというか、妻も心配してしまう。旦那にやらせているみたいという感じがしてしまう。いや、そんなことない、もうこういう時代だからということが通じない。だから、年配の人の意識はもう変わらないとそのとき思った。

自分も同世代も結局そういったしゅうとめの目を意識してこうしなければならない。娘がもう成人で県外に行っているため、2人で暮らしているが、妻がちょっと出かけて遅くなると、母が私の食事の心配をしたりする。

そういった私の意識のこと、女性側も男性側もということなのかと思っている。今、若い人たちを見ているとやっぱりかなり変わってきていると、きっと皆さんも、社内の部下の方々や若い人たちを見ても感じられるのではないかと思うのだが、世の中も変わってきて、共働きが当たり前になり、そうすれば、自然に協力していくという時代になってきているのかなと感じている。

今までこれで生きてきた人たちの頭の中はもう変わらないと、正直諦めているところである。

委員) 先ほど●●さんがアンコンシャスバイアスの話もされていたと思うが、その世代間の意識改革について、どうお考えになっているか、今の話の流れも含めていただければと思うが。

出席者) 私の職場でも、課長席は大体50代の男性がほとんどなのだが、やっぱり若手社員の考え方や意識も徐々に変わってきて、いろいろなサポートや距離感も大分縮まってきているのではないかとと思う。

ただ、やっぱり女性の管理職の割合が甲府支店は非常に少ないので、女性の考え方や女性の仕事の取組方など、こういったところをもうちょっと歩み寄ってほしいと思うが、環境を変えられないので、まず自分から歩み寄っていくことが大事なのかなと思う。変わってほしいと思うよりは、自分たちで何ができるのかと考えて、相手の気持ちに立って、いろいろな相談に乗ったり、サポートしたりということで、距離感がだんだん縮まっていたり、職場や家庭が徐々によくなっていくのではないかなと思う。

出席者) 私は新米のママなので、本当に周りがどういう子育てをしているのかというのもあまり分かっていない部分が結構多いが、私の義母の話や実母の話を聞くと、やっぱり昔は子育てがすごく大変だったというのがあって、そういった親世代を見て育ってきている私たちの世代では、そういった母親が苦勞している姿を結構見ていたので、そうならないように、自分も夫と協力しながら、家事、育児を進めていきたいという思いはある。

だが、やっぱり夫側もそういう親世代を見てきて育っているところもあると思っていて、今はそういった時代の流れで、だんだん共働き世代が多くなっていて、そういった生活が当たり前に近い近づいている世の中になっているのではないかと自分自身は思っている。

こういった皆さんの悩みなど声を大きくして言うことで、世の中に取り上げてもらって問題を解決できていったら、男性、女性にかかわらず働きやすい職場環境になっていくのではないかと今の話を聞いて思った。

出席者) 私と夫も東京出身なので、山梨には親族が1人もいない中で5人の子供を育てるという形だった。夫に仕事を頑張ってもらって、私在家の中にいられる環境が私の場合はあったので、約14年間専業主婦としてやってきたが、専業主婦だけやっても大変、さらに仕事を抱えるとなると、またさらに大変だと思うが、やはり親族も山梨にはいない中での子育てというのは、とても大変だった。

ただ、やはり助けてくださる方、保育園、児童館、病院、地域の方々には、本当に支えていただき、ありがたいことに子供たちはいい子に育っていると思う。5人の子供たちが健やかに育っている。

個人的に思うのは、やはり仕事をしながら子育てができる環境、それから、子育て一本に踏み切る女性というのも選択肢としてある社会になるといいなと思う。

女性には妊娠、出産に適した時期がどうしてもあると思う。個人差があるが、私は10年間で5人産んで、妊娠しているか母乳をあげているかという10年間だった。とても仕事に復帰という形は取れなかったし、日々の生活で本当に精いっぱい。だけれども、ある程度落ち着いたときに、社会に出たいという欲、気持ちはすごく芽生えてくる。

本当に大変だったが、私にとっては宝物の14年間で、子供たちと一生懸命向き合って、日々公園で遊んで、何かそういったものも、自分の人生にとっては本当に大切だったと思う。

こうして社会に戻るとき、そこが夫の会社だから復帰させてもらいやすかったというのもあったが、子育てしかやってこなかった女性がいざ働こうとなったときの受皿というも

のを、各企業にはどれくらいあるのかなというところ。それから、やっぱり女性の妊娠、出産に適した時期と女性がキャリアを積まなければいけない時期がどうしても重なるという現実である。これを何かもう少し行政がうまくできると面白いなと個人的には思っている。

例えばだが、公務員試験の年齢制限が県であるかどうか分からないが、あったとすると、女性が20代とか30代前半まで、出産に適した時期だとするならば、女性の公務員試験を受けられる年齢を、男性と差をつけるとか、そういったことをやったらすごく面白いと思うし、あと個人的には、やっぱり夫婦が仲良くないと2人目、3人目がなかなか生まれないと思うので、保育園も働くから預けるという条件だが、例えば月に1回デートをするために保育園に預ける日があったりとか、今現在そんなものは世の中にないと思うが、そのような子育てをしながら頑張る人たちを応援できるもの、特に高齢出産の方も多いが、その前にやっぱり出産を考えやすい社会として何かできるといいのではないかと考えている。

出席者) 意識改革ということだが、私の中では、昭和世代の男性の意識改革は多分無理だと思っている。きっと頭では分かっているけど、感情ではなかなか女性と同じ気持ちにはなれないと思う。

私の父も昭和生まれだが、私がお茶碗を洗っていると手伝ってくれるが、手伝ってあげている、何々してあげている、洗濯物を取り込んであげたよというような、何かをやってあげているアピールがある。ということは、そもそも私がやるものを手伝っているという気持ちが強いと思う。

なので、本来は同じ目線に立って一つのものをやるというのが、女性が活躍しやすい環境なのかなと思うが、その意識改革は難しいところなのかなと思う。

意識改革もちろん大事だが、ある程度女性が働きやすくするためには、当社でも、子供が小さい職員の方がいらっしゃるが、熱が出ると、一番最初に保育園からお母さんのところに電話が来る。仕事がたくさんたまっているのに、3時に帰らなければならない。ごめんなさい、ごめんなさいと言って皆さん帰っていくのだが、どうしてお父さんではないのかと思う。そこはもっと均等に考えて本来はやるべきだが、やっぱり保育園側もどうしてもお母さんが一番になっている。

そういった場合に、例えばお母さんが仕事もしながら働けるということを考えたときに、お父さんも休めない。お母さんも忙しいといったときに、じゃあ代わりにそれをやっていただけの誰かがいる。ベビーシッターではないが、何かそういった制度があるといい。どちらかがやるとなると、またそこでけんかになったりもあると思うが、そういった行政の制度があるとすごくいいと思う。

都内だと、病気の子供を預かってくれる施設もあるが、そういったものはまだまだ山梨県には少ないと思うので、そういったものがあると、本当に女性が働きやすい社会になると思う。

出席者) 男性の意識改革について言えば、少し話が戻ってしまうかもしれないが、職場で私の目の前に座っている男性は、例えば、日用品の何かがなくなったら、自分で買わなければということも多分気づくタイプだと思う。なので、先ほど皆さんがずっとおっしゃっていた家事の話は、手伝ってあげているという話もあるかもしれないが、自主的に自分の責任でこれをやらなければならないと思うと、例えば洗剤がなくなったな、買い置きもないな、では買わなければということまで意識がいくかという話かもしれない。

私も昭和生まれなので昭和世代だし、自分自身も就職した頃は結婚したら辞めるのが当たり前という意識を持っていた。それで、今はそうではないが、変わらないという話もある中で、それがよかった、それが当たり前だということで生きてきたわけなので、それはそれで尊重しなければならない。

なので、みんなに世代間の考え方の違いがあるが、その世代の方がおっしゃることは、何も意地悪で言っているわけではなく、それがよかった、それが尊重されてきたという時代の考え方なので、それを受け入れた上で、何かいい施策に持っていかたいと思う。

出席者) 意識改革が大変だという実感が一つあるとすると、私は人事の部署なので、男性の育休取得を推進していたが、5年前は社内に育休を取ってくださいと推進すると、役職者の方から、迷惑だからそういうのは推進しないでいただきたいというクレームが殺到した。若い男性社員に急に1か月も2か月も休まれてしまうと、実際には業務が回らなくなってしまいますので、そういった広報活動は控えてもらいたいと言われていた。

ただ、それにもめげずに、毎年毎年同じ時期に育休を取りましょう、私たちの会社はこれだけ取得率のパーセンテージが低い、世の中とはずれているということ、向こう側の言い分も聞きながら、こちらはこういう時代背景もあるのでやりましょうと、やはり何度も繰り返し話し合いをする中で、考え方を少しずつ変えていっていただいたし、時代背景もあって変わってきたと最近を感じる。

今年も育休の給付金制度の改定もあって、今年お子さんが生まれた男性職員が今、全員育休を取っているの、たった5年だけれど、そういった話し合いを重ねることも大事だったのかなと思っている。

ちなみに確かに男性、私の夫もだが、やってあげている感が満載なときがあるが、そうすると、中学生の娘が、そういうのよくないよ、今の時代に合っていないからとか言って、学校でジェンダーの教育をたくさんしていただいているようで、子供から親に、そういう考え方は今は間違っているよと言われると、私が伝えるよりも効果は歴然で、夫にも響きやすいかなと思うので、そういった子供世代に教育をしていただくことで、親世代とか祖父母世代にも響いていくものも確かにあるのかなと感じている。そういったところで、少しずつ理解し合っていければいいのではないかなと思っている。

委員) 今日、皆様のお話を聞いていて共感した。どういう意味で共感かというと、私も妻に育ててもらいながら家事をやり、仕事もやり、議員の活動もしながら、農業をやっているの、非常に苦勞をかけていて、心得ながら家事は割と何でもやるのだが、でも、やっぱり

幾つかお話が出ていたが、人は1人で生活していくのにやらなければならないことは、一人暮らしだと1から10までみんなやるわけである。だが、夫婦になると、夫のほうがほとんど何もしないことのほうが、場合によっては効率的なこともあるかもしれないが、やっぱりそれはおかしいだろうと思う。

私のところは、上の子供が就職して、下の子供は大学2年生だが、上の子が生まれるときはすごくもううれしくて、沐浴の指導を受けて、毎日家でお風呂に入れていたら、自分が帯状疱疹になったという笑い話で、あまり笑えない気がするが、でも、それはすごくやっているふうに見えるが、多分妻から見たら、そのぐらいのことは当たり前という感じなのかと思う。

子供が親に、今の時代そうじゃないよというお話も聞くと、やっぱり本当に教育だなと思って、もちろん子供が自立していくため、生活していくのに何をしなければならないのかを、家庭の中で教育していかないといけないと思うが、そこも、もしかしたら今の学校教育、社会教育の場面でジェンダーのように、あまり捉われずに自分が自立することを教えてくれている機会が以前より増えたのかなと思う。

ただ、実は私もこういうジェンダーの課題に30年近く関わってきているが、やっぱり一番課題なのは、私が身をもって出産をするというライフイベントはできない。逆に女性の場合は、マミートラックもあったりして、どうしても出産をするときには仕事を休まなければならない。仕事を休むことで、自分がキャリアアップしていこうと思っている路線から外されたりすることが生じると思うが、そこも、長年家にいて子育てをやっていたとしても、今度、仕事に復帰するとき、その部分をどう評価してもらえるかという社会に、どうしていくか。つまりマミートラックにならないようにするにはどうしたらいいのか。

男性が1か月育休を取ると、今はよかった、すごいねだが、もっと取ってもいいわけだし、ただ、若手の男性の社員に1か月も休まれると困るという認識があるということは、きっとその仕事のメインを若い男性社員がやっているところがあるかもしれないし、そこをどう分担し合っているか、そういったところの解決策を、このM i r a iクエストでいろいろと皆さんで共有して、共感して、そして政策提言も私たちにもぶつけていただきたい。

私たちは行政の人間ではないので、議員として行政に提案をしていくときに、皆様のそういう現場感覚というか、自分の経験してきた感覚でそれをぶつけていただいて、私たちはそれを一緒に考えて、解決策を施策として提案していくということだと思う。

今、皆さん女性で出産というときに、仕事を休まなければならない。でも、男性は休まなくてもいい。その間キャリアは順調に進んでいく。これを自分が復帰したときにフォローしたりカバーしたり、あるいはリカバリーできるかというところ、何かもし今の時点であったら聞かせていただけたらありがたいと思う。

出席者) 会社で若手から年齢層が上の方まで、こういう今時代だよということをメディアだけで情報収集するのではなく、行政という単位で伝える機会というか、発信する機会、受けた人だけが受けるではなくて、どう理解を深めていただけるかというところがポイント

トになるのかと思う。

あと実際ちょっと幾つか話も出ていたが、母世代というか、少しアッパー層世代の方々が変わらないのではないかというお話も聞いたが、そういう方々が、例えば夫が洗濯しているとかわいそうと言ってみたり、奥さんが頑張らなければならないと思わせてしまう発言など、そういうものを会社内や私生活の中でも改革できるような取組があると、もう少しいろいろな方、女性も男性も活躍しやすくなるのではないかと思った。具体的な施策までは思いつかないが、何か意見を集めて実行できるような機会があったら、ぜひ改革していただけたら、女性も輝ける未来があると思う。

委員) 今日こういう機会をつくっていただき、改めて女性の皆さんが輝く、そんな時間を増やしたい。増やしていくことは大事だと思う。本当に今日限られた時間だったが、どこを望むかと思ってはいるものの、引き続きもっともっと笑って過ごすことができるように、私たち議会としても活動していきたいと思うので、引き続きいろいろな声を聞かせてほしい。

委員) この山梨M i r a iクエストについてちょっとお尋ねしたいが、参加条件が企業内プロジェクトを推進するというので、皆さん、今、各企業には企業内プロジェクトがあるということよろしいか。このM i r a iクエストに参加される前からこのプロジェクトがあったのか。そうである方は挙手していただいてもよろしいか。これをきっかけに社内プロジェクトが始まったとか、それともこのM i r a iクエストに参加する前からプロジェクトがあったのか、社内でもプロジェクトが進んでいたのかどうか。●●さんは5年ぐらい前から男性の育休取得を推進している、それもプロジェクトか。社内プロジェクトとはまた違うのか。

出席者) それはプロジェクトではなくて、通常の業務である。

委員) 資料を見ると、主な活動で企業内プロジェクトの成果発表とあるが、今はプロジェクトがあるという方は手を挙げていただいてもよろしいか。(全員挙手)

今はあるということで、ではこのM i r a iクエストがきっかけでプロジェクトが始まったということよろしいか。(全員挙手)

このM i r a iクエストをする中で、女性管理職がこれから増えていく、いきそうだと思っていられる方は挙手していただいてもよろしいか。(複数名挙手)

どのくらい時間がかかりそうかと考えているのか伺いたいが、二、三年ぐらいで増えていくと思う方は手を挙げていただいてもよろしいか。(複数名挙手)

すばらしい。5年ぐらいかかるかもという方は。もっとかかるかもという方は。(複数名挙手)

必ずしも女性管理職が増えるということが、女性の活躍というか、男女共同参画につながるとは思わないが、やっぱり県としてもぜひ社会参加というか、経営層に関わる女性を

増やすという目的を持ってこの事業があると思うので、皆さんそれに向けて各社で、また皆さんの立場でしてくださっていることに感謝申し上げます。ぜひ引き続き、私たちのできることは精いっぱいまた取り組んでいくので、いろいろお声がけしていただければと思う。



※ 意見交換会の様子